
ガラス瓶

一色 赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラス瓶

【Nコード】

N5725J

【作者名】

一色 赤

【あらすじ】

ガラスの瓶。その中で私たちは生きている。

つてな感じのショートストーリーです。よかったらどうぞ

ガラスの瓶。その中で私たちは生きている。

一人にひとつ。ここには大小様々、色とりどり、多種多様のビンがある。

キラキラ輝く私たちのお家は、ひとつ、ひとつが宝石のように美しい。

まるで私たちは囚われたフェアリーのように。ひっそりと、それぞれのビンの中で生きている。

しかし、不自由な思いはしていない。ここが私たちの世界だから。一定の距離。触れられない。話せない。お互いを認識しあっているのかも解らない。ただこの小さなビンの中でそれぞれの生せいを生きている。

私は、そんなみんなを観察するのが好きだ。私の仕事とも言える。この世界で好きなことに没頭すること。それが仕事になる。給料がもらえるわけではない。ただ、生きる意味として、信念として、あるいはタダの暇つぶしとして、仕事をしている。と、私が勝手に思っているだけでもある。

例えば、私の右側。茶色いビンに入っている彼。彼はずっと逆立ちをしている。朝から晩までずっとだ。本を読む時はもちろん、寝るときだって壁に寄りかかって寝ている。彼が逆さまじゃないの（頭が上で足が下なこと）を見たことがない。きっと彼の頭のとっぺんはとてつもなく平たく出来ているのだろう。腕だつて凄く太いし、逆さまのほうが安定するに違いない。私も一度挑戦してみたがダメだった。そのときから、彼は私の中で逆さまチャンピオンになった。いつかチャンピオンが地に足つけるところを拝みたいと思っている。

他にも私の正面のビンの子はまだ小さな女の子だけれど、ずっと踊っている。小女のビンは踊りやすいように、丸くて大きい。金魚鉢のような形だ。その中で少女は、クルクル、クルクル、手足を伸ばして、あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、高く飛んで、華麗に着地、ポーズを決めて、最後は可愛らしくお辞儀をする。私は少女に精一杯の拍手を送る。少女はアンコールに応えるかのようにまた踊り始める。

それから、私の左側。ピンク色と緑色のビンの二人は恋人同士だ。二人は決して近い距離に居るわけではない。しかし、いつの頃からか、密かに愛を語り合っていた。大きな画用紙にお互いへのメッセージを書き合う。おはよう。から始まって、おやすみ。まで二人は毎日たわいもない恋人同士の話をしている。二人とも本当に幸せそうで、私はそんな二人を見るのがとても好きだ。

そして、今私が一番興味があるのは、少し遠いところにいる青いビンの彼だ。彼のビンは銭湯の煙突のように細長い。不思議なことに彼のビンにはどこからか、ピチヨン、ピチヨンと水滴が落ちてくる。おかげで、彼のビンは半分くらいまで水が溜まっている。最初は傘をさしていた彼も、どんどん溜まっていく水たちになす術もなくただただ見ているしかなかった。が、それから水は落ち続け、最近の彼は一日中ずっと水の中に潜っているようになった。彼はまるで魚のように優雅に泳ぐ。上へ、下へしなやかに動く肢体は人魚のように美しい。もしかしたらこのまま人魚になってしまうかもしれない。そんな期待を込めつつ、今後の彼に要注目だ。

そんなある日、私の後ろに新しいビンが出来ていた。どこから来たのか、少し疑問に思ったが、それはそれ。私は新しく来た彼がどんなアクションをするのか気になって観察を始めた。

彼は何か考え事をしているのか、ビンの中をせわしなく歩きまわっていた。ウロチヨロウロチヨロと、絶えず落ち着きがない。しばらくそれが続いた。三日目、ああ、彼はそういう人なのかと思っていた矢先、彼が動いた。なんと、ビンに体当たりを始めたのだ。何回も何回も体をぶつけ続ける。彼は体の大きな男で、ラグビーでもやっていた様ながっしりとした身体つきをしている。そんな彼のアタックに、ビンは揺れた。ぐらんぐらんビンは揺れて、やがて倒れた。私はハッと息をのむ。彼はビンの中から器用に這い出ると、そのままどこかへ行ってしまった。遠い向こう、私が見えないところへ。彼が居なくなつたビンだけが悲しそうに転がっていた。

それからしばらくして、私は、水の男が居なくなっていることに気づいた。彼のビンは水がいっぱいで、きつと溢れ出たのだろう。彼は人間のままでいることを選んだのか。それとも、もつと大きな、本物の海を目指したのか。どちらにしる、彼はこの世界からいなくなってしまった。

他にも、たくさんあつたビンたちが、少なくなつてきているのに気づいた。みんないつかの彼のようにビンを倒して、あるいは水の男のように何らかの手段を使ってビンから抜け出したのだろうか？どうやって？何のために？どこに行くの？私には解らない。どうしてこの世界から逃げようともがくのか。こんなにも平和で静かで美しい世界なのに。寂しいことなんて何も無い。あたりを見渡せば、ここにはたくさんの方が居る。どこからかまたやってくる。興味深い人もいる。踊る少女の成長も見れる。ほほえましい恋人達が幸せもくれる。怖いことなんて何も無いのに。

しかし、みんなが逃げ出してしまったらどうなるだろう？誰も来なくなったら？私は一人になつてしまふのだろうか？そんなことになつてしまつたら？

。。。それだけは少しコワイかもしれない。。。

。。。私の世界のオワリかもしれない。。。

けれども、たくさん倒れたビンたちは、『昔、確かにここに立っていたのだ』と言うように、キラキラと輝き続けるだろうか。私はゆっくり目を閉じて、この美しいビンたちが、まるで神々の遺跡のように静かに眠る姿を想像した。私はひとり、狭いビンの中でふつと笑った。

そんな世界もちょっとだけ見てみたいな。と思った。

(後書き)

才手はありません；；

この世界観を書きたかった！！

最後まで読んで下さってありがとうございます！！
酷評お待ちしております。。。(

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5725j/>

ガラス瓶

2010年10月16日00時45分発行